

U021-16

会場:304

時間:5月24日 15:30-15:45

## 科学的不確実性を伝える企画としてのサイエンスカフェ Science Cafe for introduce of Scientific Uncertainty

久利 美和<sup>1\*</sup>, 村上 祐子<sup>1</sup>, 立花 浩司<sup>2</sup>

Miwa Kuri<sup>1\*</sup>, Yuko Murakami<sup>1</sup>, Koji Tachibana<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東北大学大学院理学研究科, <sup>2</sup> 北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科

<sup>1</sup>Science, Tohoku University, <sup>2</sup>Knowledge Science, JAIST

[はじめに]本サイエンスカフェ企画は、「不確実な状況での法的意思決定」プロジェクト(社会技術研究開発センター(RISTEX)の受託事業)の企画のひとつとして行っている。プロジェクトでは、科学の持つ不確実性を法律家が十分に理解し、科学者と協働していくためにはどうしたらいいのか、不確実性の先に、よりよい法的判断をするには、どのような仕組みがあったらいいのかという問いかけから出発しており、法と科学の協働を目指すためのシステム作りを目的としている。本発表では、「不確実な状況での社会的意思決定」として地球惑星科学分野と問題を共有することに主眼をおく。

[法廷での背景]科学の知識は、技術に応用され、社会に広がっていくが、近年、その伝搬スピードは飛躍的に速くなっている。しかし、開発された科学技術や製品などがもたらす社会への様々な影響の全てを確実に予測することはできない。こうした科学技術の持つ多様な潜在的リスクを社会や個人での受容過程で、司法判断の場面で紛争となることは少なくない。そして、ひとたび「科学的知見」を前提とする法的判断がなされると、それは、社会において大きな影響力を持つ。ところが、司法関係者は、科学技術の持つ不確実性を十分に理解しているとはいえない現状にある。他方で、科学者や技術者も、科学的知識がその非専門家という意味では一市民に過ぎない司法関係者にどのように受け止められているのか、そしてその社会的影響について十分理解しているとはいえない現状にあり、司法の仕組みを知らないまま、法廷に協力することは難しいという側面がある。そこで、不確実な科学的状況において、司法判断が必要とされるような場面において、司法関係者と科学者・技術者がいかに協働し、法的意思決定を行っていくべきことが求められ、プロジェクトが立ち上がった。

[サイエンスカフェ企画]第1回目は、『法と科学の哲学カフェ「合理性の衝突」』というタイトルで行った。プロジェクト・法グループの亀本氏と同・科学グループの村上(発表者)が登壇し、それぞれの立場から意見を闘わせることで、法学者には法学者の、科学者には科学者のロジックがあり、法学者と科学者は、お互いのロジックの違いについて熟知しているわけではないということ、ありのまま見せることを目標とした。亀本氏からは、裁判官や法学者を含めて、法の専門家の方々共通にみられる独自の思考について具体的に紹介され、裁判官が裁判においてどのような考え方をしているのかについて、明らかにする意義、村上より「科学者は、科学のすべてについて詳しいわけではない」「科学者に過剰な期待をしないほしい。それを踏まえた上でみんなのコメントが出るような仕組みをつくることができればいいのか」と述べた。スタッフを含めて28名の参加があり、各種意見交換の場となった。第1回目の企画での会場からの問題提示のひとつとして「不確実な科学的状況での行政判断」があげられたことから、第2回目は、「不確実な科学的状況での社会的意思決定」をテーマに、インターネット等を通じて、生活者がそれぞれに判断材料となる生の情報を手にすることができる状況での、とくに「生活者としての視点」に注目し、科学的不確実性に起因する問題意識についてプロジェクト側が情報収集を行うことも目的に実施予定(2011年5月を予定)である。本発表では、第1回目と第2回目の企画を通じた、「科学的不確実性」を社会に伝える方法についての取り組みを紹介する。

キーワード: 科学的不確実性, サイエンスカフェ

Keywords: Scientific Uncertainty, Science Cafe